

國學院大學学術情報リポジトリ

卸小売商店からみる美濃印判磁器の仕入相場：
佐原・紀の国屋の仕切証をもとに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鎌形, 慎太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001923

卸小売商店からみる美濃印判磁器の仕入相場

— 佐原・紀の国屋の仕切証をもとに —

鎌形慎太郎

はじめに

19世紀中葉は、消費地遺跡の陶磁器出土状況に変化が見られる時期である。すなわち瀬戸美濃製品、特に磁器の出土割合が高くなるのが夙に知られている⁽¹⁾。生産地の美濃では、磁器生産に本格的に乗り出す中で、上絵付・釉薬に関わる新技術の開発とともに、下絵付の装飾技法が目覚ましく進展した。中でも、大量生産の動きに呼応したのは摺絵と銅版転写という印判磁器であった⁽²⁾。美濃では、印判による絵付技術が明治中期までには登場し、以降、日常食器生産に導入される。

その状況は、生産地と消費者をつなぐ陶磁器卸販売業者の商品構成にも直截に反映されている。例えば、大正2年(1913)に焼失した静岡県沼津市の陶磁器商「いせう」の一括廃棄資料は、瀬戸美濃磁器が全体の98%にあたり、摺絵・銅版転写製品が中心を占める事実が解明された⁽³⁾。

近年、美濃で生産の主翼となった摺絵・銅版転写技法に関して、その始期⁽⁴⁾と終期の時期確定に注意が払われている。美濃印判磁器の終期に関しては、生産地相場書を分析した山下峰司によれば、銅版転写製品が相場書に数多く掲載されるようになるのが明治30年代からだが、従来、明治30年代に次第に衰退したと見られていた摺絵の中心時期を明治22年(1889)～同31年(1898)としつつも、相場書には摺絵製品が昭和初期まで掲載されている点からその終期の解釈の是正を求める提起がなされた⁽⁵⁾。

ところで、筆者は、関東の商都、佐原の陶磁器卸小売商・紀の国屋に残存する明治・大正期の陶器納品仕切証を分析する中で、明治30年代に、摺絵を意味する「銅版」と銅版転写を意味する「本銅版」とが区別されて表記されていることを把握した。本稿では、量産が本格的になる時期の印判磁器製品に関し、文献によるアプローチから器種ごとに価格の差異や相対的な価格を把握する。その上で、卸小売商店にみる美濃印判製品の仕入相場傾向を指摘する。この検討から、近代美濃陶磁器研究の進展に寄与できればと考える。分析対象時期は、生産地相場との比較が容易な明治30年代に絞った。尚、本稿は、平成25年～27年度科学研究費助成事業基盤研究C「地域文化遺産の再生に関する総合的研究—千葉県香取市佐原 紀の国屋大蔵の保存と活用」(研究代表者：内川隆志、課題番号：25350395)の調査をもとに、その最終報告書⁽⁶⁾刊行後に継続している研究成果の一端である。

1 陶磁器卸小売商店・紀の国屋の佐原開業と経営規模

明治期から千葉県香取郡佐原町において陶器・漆器販売業を営む紀の国屋の系譜は、紀伊国有田郡

箕島村に辿ることが出来る。江戸時代、箕島陶器商人として江戸との往来が見られるようになるのは2代目佐山安兵衛（1793～1845）以降である。箕島陶器商人とは、農閑期に紀州海南・黒江村で生産される黒江塗の椀・折敷等の漆器を仕入れて九州で売り、その資金を元手に肥前の伊万里で陶磁器類を仕入れて江戸で販売した商人集団で⁽⁷⁾ある。商人らは、日本橋箱崎町1丁目の瀬戸物商坂本三右衛門のもとに荷揚げして仲買人を集めて競り売りを行う一方、中には江戸周辺の町や村に直売行商する者も出現し、関八州直売行商ルートを拡げ、日光道中・中山道・水戸街道・東海道・甲州道中・銚子付近を行商した。

明治3年（1870）頃から明治16年（1883）3月まで4代目佐山安兵衛（佐原初代当主）は東京府下京橋区八丁堀仲町22番地（現 中央区八丁堀二丁目）を拠点としていた⁽⁸⁾が、同16年4月に佐原に移住した。開業理由は、旧紀州箕島陶器商人が近代に結成した合資会社紀陶社の資金をたよりに佐原にて営業を続けてきた川島吉兵衛の招聘による。その後、紀の国屋は陶磁器・漆器卸小売業を軸に経営を本格的に展開していった。

佐原での開店当初の状況は、明治20年（1887）7月付で香取郡長・大須賀庸之輔宛に同店が提出した「所得金高届」という書類から窺える。この書類には、明治17年（1884）から同19年（1886）までの売上高や必要経費が列記されている。このうち、明治17年時点の経営規模は、商高が2978円12銭、所得金が264円76銭5厘であった。商高に着目すれば、明治18年が1834円余、同19年は1547円余であった。明治10年代後半3か年の平均商高は約2120円だが、年によって利益率の変動が極めて大きかったようである。そして、紀の国屋が卸小売業を経営する中で、従業員が明治17年には3人、その翌年以降には4人が住み込みで雇用されていた。

卸小売販売相手には、佐原町内の同業陶漆器商や近隣郡内各商店（雑貨荒物商等）への卸売と、店内販売や個人宛小売がある。明治39年（1906）3月に佐原税務署が発行した「物品販売業営業課税通知書」によれば、卸売額1980円・小売額4500円・建物賃貸料250円・従業員3名とあり、本稿で分析対象とした明治30年代は紀の国屋が小売需要を満たすウェイトが高かった時期と把握される。

2 明治30年代紀の国屋における日常食器の仕入状況

(1) 紀の国屋陶磁器仕入の全体像

紀の国屋では、明治30年代と大正初期の仕入問屋からの陶磁器代金仕切証が多く残されている。同店の印判磁器仕入を分析する前提として、まずは前稿⁽⁹⁾に基づき明治37年の陶磁器仕入の大まかな傾向を掴もう。紀の国屋における陶磁器仕入品を用途別に分類すれば、(1) 食膳具…皿類・丼類・湯呑・煎茶碗・急須・猪口・燗德利、(2) 貯蔵具…酒瓶・甕類・大瓶・赤広瓶、(3) 神仏具…仏事の供献具（仏器・香炉）、(4) 園芸具…植木鉢、(5) 工業製品…土管、(6) 衛生具…便器・痰壺、(7) その他…文房具（仕切筆洗）・盃洗・調理具（搗鉢・わさびおろし等）・花瓶・喫煙具他に大別される。

紀の国屋の明治37年（1904）の仕入は、(1)が仕入器種・個数ともに相対的に最も多い。日常食器販売が商品構成の主翼と考えて良い。日常食器の仕入先については2(2)で詳しく把握したい。

(2) 紀の国屋における日常食器の仕入ルート

明治37年(1904)の主要な日常食器仕入は、(1)皿類、(2)井類、(3)湯呑・煎茶碗・茶漬碗が多い。

(1)皿類は、3寸5分皿(「三五皿」と表記)から尺皿まで見られる。変形皿(本銅版角尺皿・梅軍配形皿等)もあるが、丸皿が多い。深小皿・醤油皿・3寸5分皿等、小皿ほど大量に納品され、8寸皿以上では一度の納品量が少ない傾向がある。技法は摺絵・銅版転写が多く占める。納品問屋は、東京市日本橋区蛸殻町の岩田久七・岩井松之助・瀧澤政吉、同区浜町の森竹次郎・山和商店が中心である。生産地問屋(岐阜県土岐郡多治見町柴田平太郎・栃木県芳賀郡益子町大塚平三郎)からの直接納品も少数見られるが、原則は日本橋区蛸殻町・浜町の蛸浜陶磁器問屋から納品されている。

(2)井類は、5寸井・6寸井等、寸法が小さい器種を一括で納品されるケースも多い。技法は銅版転写の井類が多い点も特徴である。納品問屋は、東京市日本橋区浜町の森竹次郎・山和商店、京橋区の満留寿商会・大屋初太郎が中心である。

(3)湯呑・煎茶碗・茶漬碗の仕入で特徴的な点は、200~300個の一括仕入れが顕著であり、中には500個を超えるケースも見られる。組単位での納品もある。技法的には手描に加え、摺絵・銅版転写が目につく。納品問屋は、東京市日本橋区蛸殻町の岩田久七・岡嶋善三郎、同区浜町の森竹次郎・山和商店・斎藤豊次郎が中心である。但し、相馬焼の福島県双葉郡大堀村志賀喜隆から湯呑・煎茶碗が納品されているように、紀の国屋では複層的な仕入ルートを持っていた。

以上の傾向から、紀の国屋では日常食器の多くを東京市日本橋区・京橋区、中でも日本橋区蛸殻町・浜町の蛸浜陶磁器問屋から仕入れていたことが窺われる。これらの問屋街の創業者は、多治見等の窯元出身者であり、東京の卸問屋と生産地を物流ネットワークで結び、直接大量に仕入販売を行っていることが多い。例えば、濃栄合名会社の斎藤豊次郎⁽¹⁰⁾・満留寿商会の加藤助三郎⁽¹¹⁾等は当時の業界を牽引する会社組織であった。また、京橋区の大屋初太郎は銀座松屋陶器部に商品を卸していた。こうした陶磁器卸問屋が京橋区・日本橋区に集中している要因は好都合な立地条件とも関わっていた。殊に日本橋区浜町の場合、かつては大名屋敷・中屋敷・旗本屋敷等の住居が点在していたが、明治期には土地所有の入れ替わりが激化し、空き地になる場合が多々あった。蛸殻町・浜町周辺の広い土地は借地料も安く、生産地より船で陶磁器を搬入しつつ発船所から容易に納品できる立地環境にあった⁽¹²⁾。紀の国屋が日常食器をはじめ、様々な用途別器種を効率的に調達し得たのは陶磁器の東京市場との強い結び付きが背景にある。換言すれば、蛸浜陶磁器問屋を中核とした東京陶磁器市場では、美濃で生産された手描製品に加え、大量生産が叶った摺絵・銅版転写製品の素早い仕入動向があったということでもある。

3 明治30年代紀の国屋における美濃印判磁器の仕入相場

(1) 美濃窯業における摺絵・銅版転写技術の導入

紀の国屋における美濃印判磁器仕入を分析するために、印判磁器の量産技術を掴んでおきたい。

明治20年(1887)の陶磁器生産額は、佐賀380905円、岐阜317529円、愛知303073円、京都180209円であった⁽¹³⁾。ところが、明治中期後半には、美濃製品が中国向け、国内向け生産量において有田・京都

を圧倒するようになった。岐阜県土岐郡の生産額は、明治30年（1897）には同20年（1887）の約4倍、同40年（1907）には約7倍に増加した。窯業生産が発展した理由は、①生産に有利な条件、②経済販路の拡大、③量産技術の発展等、諸要因が絡み合って展開した点が大きい⁽¹⁴⁾。

①は、明治5年（1872）の窯株・蔵元制度の廃止により、自由営業が可能になり、純農村地の土岐郡18村で窯が開かれた。また、東濃地域は石材が豊かで、長石・珪石・蛙目等の陶石や木節粘土・白粘土にも恵まれていた。さらに、製陶労働者が周辺の農村から確保できた点や、燃料の松が東濃西部から安定的に入手し得たことも好条件であった。

②は、海外市場への販路拡大が著しくなった点である。日清戦争後の販路は、米国3割・中国朝鮮3割・内地4割という状況であった。その後、例えば、紀の国屋にも多くの美濃製品を卸した業者の加藤助三郎（東京・満留寿商会）は明治31年（1898）に農商務省嘱託となり、中国への輸出と共に南アフリカへ雑貨の輸出に乗り出す等、貿易面での活躍が陶器商の間で見られることとなる。

③は、製品の量産体制を支えた技術の開発が挙げられる。明治期の美濃では、輸入酸化コバルトの導入による絵具の質の向上、蛙目強粉を原料とした薄手磁器生産の発展も注目されるが、摺絵・銅版転写技法による量産絵付の開発も新しい動向である。

摺絵は、和紙に柿渋を塗って作られた渋紙に透かし彫りを入れ、それを器面の上に置き、その上から呉須を刷毛摺りしてデザイン化する装飾技法である（12頁上段図版1、2）。『多治見市史 通史編下』によれば、明治15年（1882）頃、多治見脇之島の上田幸右衛門が伊勢白子から型紙職人を招いて型紙を作らせたのがその始まりで、下絵銅版転写の普及により、明治30年代前半には殆んど廃絶したと記述される。現在では、摺絵の終期に関しては、窯屋の統制番号が押印された製品の存在から昭和16（1941）～同20年（1945）までとする指摘⁽¹⁵⁾、さらには「銅版」と表記される昭和初期以降の生産地相場の存在が下限を考える鍵となっている。後述する紀の国屋の明治30年代の仕切証にも生産地相場同様に多くの「銅判」表記が確認され、大正期にもそれは継続して見られる。紀の国屋大蔵には摺絵商品の売れ残り資料は確認されなかったが、仕入問屋の仕切証には、明治30年代に皿・丼・碗・湯呑等、多くの摺絵日常食器の記載がある。

ところで、摺絵は、器面に合わせた型紙で絵付するため、何種類もの形の異なる陶磁器に同じ図柄をつけようとするとその数だけ型紙が必要になる問題点があった。そうした消耗が早いという摺絵の難点をカバーしたのが銅版転写であった。銅版転写は、蠟が塗られた銅版の表面を線彫りし、酸で腐蝕させて彫りを深くし、熱で蠟を飛ばして原版を作り、その上に呉須（酸化コバルト）を塗り、篋で表面を拭き、紙を当てて強く押さえる。こうすることで彫りの部分に残っていた呉須が紙にデザインとして転写され、転写紙となる。転写紙を器面に押し当て、水で再転写して文様づけした装飾技法である（12頁下段図版3、4）。つまり、酸化コバルト等の絵具を紙に擦り付け、その紙を湿らせて素地に押し付けると絵が素地に転写される方法である。『多治見市史 通史編下』によれば、明治22年（1889）多治見の加藤元次郎・加藤米次郎が名古屋より銅版彫刻師を招き、製版法を教わることで開発し、特許を取得したとある。現在では、銅版転写の製品は、摺絵製品とあまり大差なく登場し、以後、昭和初期にかけて主体的な製品となる見方⁽¹⁶⁾が一般的である。生産地相場では銅版転写は「本銅版」と記される。明治40年（1907）の相場には、皿・飯碗は銅版転写が摺絵を凌駕している点が指摘されている。紀の国屋の明

治30年代の仕切証にも、生産地相場同様に多くの「本銅判」表記が確認され、大正期にも見られる。紀の国屋大蔵には銅版転写商品の売れ残り資料は確認されなかったが、仕入問屋の仕切証には、明治30年代に皿・丼・碗・湯呑・煎茶碗等の日常食器の記載がある。銅版の特性は、寿命が長く、小さな図柄ならば器面に関係なく一つの銅版で繰り返し使用出来た点、大皿への転写など大きな図柄も可能で、数量が必要な輸出品の絵付技法としても普及した。

紀の国屋が大量の印判磁器を仕入れるようになる明治30年代とは、美濃の地で摺絵・銅版転写技法が本格的に量産され始めた時期であった。一方で美濃では、銅版転写による絵付の革新により、陶磁器産業の分業化（窯元―陶器商人の従属性・銅版転写紙工場の増加）をもたらしていた。

(2) 陶器納品仕切証の「銅判」「本銅判」商品と生産地相場との比較方法

13頁～18頁【表1・2・3】は、紀の国屋の印判磁器仕入商品を皿類、丼類、碗・燗徳利ごとに整理したものであり、ここから摺絵・銅版転写磁器商品の仕入相場傾向を指摘する。同店には、特に明治30年代と大正4(1915)～同6年(1917)にかけて仕入問屋からの陶器納品仕切証が膨大に残されている。仕切証は、仕入問屋が同店に発送する商品の納品内訳・代金・合計金額が明記されており、同店がどのような商品をどの程度の価格帯で仕入れていたかの情報が得られる。これらの各表は、明治30年代にかけての摺絵(銅版)・銅版転写(本銅版)表記のある商品を一覧にしたもので、単価は合計額を総数で割ることで算出した。また器種ごとに概ねの仕入個数がどんな傾向にあるかについても目を配った。加えて仕入問屋の情報も付記した。一瞥して明らかなように、同店では、印判磁器の仕入に関しては全てが東京市日本橋区・京橋区を中心とした東京市場から納品されていることが判る。その背景は2(2)で述べた。

13頁～18頁の表を基にした分析作業は次の〈ア〉～〈ウ〉である。

〈ア〉割り出した単価から器種ごとに平均値を算出する。年間に複数回納品がある場合は、必要に応じてその年次ごとの平均値を算出した。それによって平均納品単価として比較の指標とする。

〈イ〉生産地相場との単価比較を行った。生産地相場は、山下峰司 2014「近代美濃焼の“銅版・本銅版”―明治・大正・昭和のやきもの相場」(『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』18)にて作成された情報(日本経済新聞の前身『中外商業新報』『東京市場』欄「陶器」相場の美濃製品相場の表データ)を参照させて頂いた。その表の内、明治31年(1898)9月20日・同35年(1902)3月4日・同40年(1907)3月39日相場表から、同店の摺絵・銅版転写商品と同一法量のものを比較してみた。

〈ウ〉同店に納品された摺絵・銅版転写商品と同一法量の同店が仕入れた他装飾商品単価を比較した。

次節では、同店の(a)平均納品単価、(b)生産地相場の単価、(c)同一法量の他装飾商品単価を比較する。これらを基に、同店に納品された摺絵・銅版転写の納品単価を検討し、器種ごとの相対的な相場傾向を提示する。尚、生産地相場では、明治31年相場は摺絵と共に銅版転写製品が加わる時期、同35年相場は銅版転写製品の掲載数が増える時期、同40年相場は銅版転写製品が主体になり摺絵製品が減少する時期と指摘されている。いずれにせよ、明治30年代は両者が本格的に量産されており、卸小売商店の側から商品価格の事実を提示することは今後の近代美濃磁器研究の一助になると考えられる。

(3) 食器種別にみる摺絵・銅版転写商品の仕入相場

① 摺絵・銅版転写皿類の仕入

13頁～15頁【表1】を参照されたい。紀の国屋の皿類仕入商品は、3寸5分皿（三五皿）・4～9寸皿・尺皿・生盛皿に大別される。納品個数は、三五皿が概ね300ケ1単位に2セット、4寸皿が概ね200ケ1単位に2セット、5寸皿が概ね100ケないし200ケ1単位、6寸皿が概ね100ケ1単位、7寸皿が60ケ1単位を複数セット、8寸皿が40～45ケ1単位を2セット、9寸皿が一回の納品数22～60ケ、尺皿が一回の納品数20～30ケ程度である。生盛皿は、標準サイズ・中生盛が概ね120ケ1単位、大生盛が90ケ1単位という一括納品が多い。注目される点は、寸法が小さい商品ほど一度に多く納品されている傾向である。反対に8～9寸皿・尺皿と寸法が大きくなればなるほど納入頻度・納品個数が低くなっている。納品個数と頻度の関係は商品単価と密接に関わっている。原則的に寸法に応じて単価が高くなっており、必然的に単価が高くなるほど納品量・頻度が低いと考えられる。

(a) 納品皿類の平均単価

3寸5分皿全体では、明治30年（1897）9,6厘、同37年（1904）8,7厘、同39年（1906）1,73銭である。摺絵皿が1,22銭、銅版転写皿が1,12銭であり、摺絵と転写による商品単価の差異は僅少である。4寸皿全体では、明治30年1,27銭、同39年1,95銭である。摺絵4寸皿が1,17銭、銅版転写4寸皿が1,88銭であり、銅版転写の方が単価は高い。5寸皿全体では、明治30年3,67銭、同38年（1905）2,48銭である。茶銅版5寸皿が4銭、青銅版5寸皿が2,48銭、銅版転写5寸皿が3,03銭であり、摺絵と転写による商品単価の比較は即断できない。6寸皿の全体平均は5,32銭である。摺絵の納品は明治30年5月の銅判角切6寸皿のみで、単価が3,2銭である。銅版転写6寸皿は4,44銭である。銅版転写の方が単価は高い。7寸皿全体では、明治30年4,05銭、同38年3,58銭である。摺絵7寸皿が3,96銭、銅版転写7寸皿が4,3銭であり、銅版転写の方が単価は高い。8寸皿全体では、明治30年4,89銭、同39年7,54銭である。摺絵8寸皿が5,6銭、銅版転写8寸皿が7,24銭であり、銅版転写の方が単価は高い。9寸皿の全体平均は9,31銭である。摺絵の納品は明治37年9月の銅判竹霞9寸皿のみで、単価が9,55銭である。銅判転写9寸皿は9,19銭である。これだけでは摺絵と転写による単価比較は即断できない。尺皿の全体平均は11,46銭である。摺絵尺皿が12,25銭、銅版転写尺皿が10,67銭であり、尺皿では摺絵の方が単価は高い。生盛皿の全体平均は標準サイズ2,4銭、中生盛3,2銭、大生盛2,57銭であり、単純な寸法との比例関係とは言い難い。大生盛より中生盛が高い理由は需要面が大きかったからだろうか。標準サイズを基準に見た場合、摺絵生盛皿は2,06銭、銅版転写生盛皿は3,25銭であり、銅版転写の方が単価は高い。

これらの数値から窺われる点は、第一に、原則的には皿の寸法が大きくなるほど単価も比例して高くなる点である。しかし6寸皿と7寸皿の全体平均値はそうとは言えない。さらに8寸皿を例にとれば、明治30年代初頭と末期ではその差が2,65程銭ある。生盛皿（刺身皿）でも大生盛より中生盛の全体平均納品値が高い点も気にかかる。この点は、需要と供給量のバランス関係により単価が年次ごとに変動していることを示唆しているのではないだろうか。第二に、同一法量皿類の摺絵と銅版転写商品の単価を比べた時、4寸・6寸・7寸・8寸・標準生盛皿は後者の方が単価は高い点である。但し、尺皿では摺絵の方が単価は高い場合もあり、必ずしも銅版転写商品の納品単価が高い訳ではない。この点は(b)との比較が

必要となる。

(b) 納品皿類同寸法の生産地単価

3寸5分皿は、明治35年（1902）相場では、摺絵皿が1,02銭、銅版転写皿は1,15銭であり、僅かに後者の単価が高い。4寸皿は、同年の相場では、摺絵皿が1,45銭、銅版転写皿が1,7銭であり、後者の単価が高い。5寸皿は、同年の相場では、摺絵皿が1,7銭、銅版転写皿が3,4倍で2倍の差がある。6寸皿では、明治35年の摺絵皿が2,1銭、同40年（1907）の銅版転写皿が4銭で2倍の差がある。7寸皿は、明治40年の相場では、摺絵皿が5銭、銅版転写皿が6銭であり後者が1銭高い。8寸皿は、同40年の相場では、摺絵皿が7,5銭、銅版転写皿が8,5銭であり、後者が1銭高い。9寸皿は、同40年の相場では、摺絵皿が12銭、銅版転写皿が13銭であり、後者が1銭高い。尺皿は、同40年の相場では、摺絵尺皿が18銭、銅版転写尺皿が19銭であり、後者が1銭高い。尚、生盛皿に関しては、同35年・40年相場を見る限り銅版転写の製品掲載が確認されなかった。

生産地相場を見てみると、判明した寸法の皿類の全てにおいて銅版転写装飾製品の単価が高いことが明らかになった。(a)(b)との間で異なる傾向が見られるのは(a)で納品平均値を算出した点に理由があろう。そして、生産地相場の単価が、年次ごとの紀の国屋仕入単価と異なる点も重要となろう。なぜなら生産地と地方卸小売商をつなぐ東京市場相場が同店の納品単価として反映されていると見られるからである。

(c) 同一寸法納品皿類の他装飾商品単価

3寸5分皿は他装飾商品の同店納品例が確認できない。4寸皿は、明治37年（1904）に京橋区東湊町・大屋初太郎が4寸皿単価1,7銭で納品した（目録118-2）。同35年生産地相場の銅版転写4寸皿と青地4寸皿の単価は等しい。しかし全体としては他装飾技法（手描・色絵・吹絵等）による納品単価の方が印判皿以上に高い。7寸皿では、明治38年（1905）12月4日に同問屋が菊7寸皿を単価7,2銭・錦牡丹7寸皿を単価10,44銭で納品した（目録124-2-4）。同39年9月9日にも牛込区・鶴見藤吉が円子吹鶴7寸皿を単価36,5銭で納品した（目録125-2）。8寸皿では、同37年3月11日に日本橋区南茅場町・榊原米五郎が錦8寸皿を単価17銭で納品した（目録118-2）。尺皿では、同年4月13日に同区蛸殻町・瀧澤政吉が唐草尺皿を単価50銭で納品した（目録118-2）。生盛皿は、京橋区満留寿商会・日本橋区蛸殻町岡嶋善三郎や家満加合資会社が手描の生盛皿を印判磁器より高い単価で納品した（目録124-5）。

② 摺絵・銅版転写井類の仕入

15頁【表2】を参照されたい。紀の国屋の井類仕入商品は、5～9寸井・尺井がある。尚、山下峰司によれば、この当時、井という名称はあっても鉢は存在しない点を指摘している。それは当時の井概念は広く、現在の鉢に相当するサイズの尺を超えるものを含む一方で、3寸程の小さなものも井と呼んでいたことと関係している⁽¹⁷⁾。同店でも井の仕入は見られるが、仕切証に「鉢」の呼称は確認されない。井の納品個数は、60～100ヶ程度が中心である。皿類同様、寸量が大きくなればなるほど納入頻度・納品個数が低くなっている傾向があり、納品個数と頻度の関係は商品単価と密接に関わっている。やはり単価が高くなるほど納品量・頻度が低いと考えられる。

(a) 納品井類の平均単価

5寸井の全体平均は3,15銭、6寸井は3,8銭、7寸井は4,25銭、8寸井は6,93銭、9寸井は12,3銭、尺井は

15,3銭であり、基本的に寸法に応じて単価が高くなることが確かめられる。5寸井は、明治37年・39年に各1回納品されているが、摺絵と銅版転写による納品単価の差異は見られない。6寸井は、摺絵が4,5銭、銅版転写3,28銭であり、前者の方が単価は高い。その傾向は7寸井も同様で、摺絵が5,26銭、銅版転写が4銭であった。だが、8寸井では、摺絵が6,13銭、銅版転写8銭であり、後者が前者を上回っている。同店の井鉢の納品のみで摺絵と銅版転写の単価が高いか即断することは難しく、(b)納品井類同寸法の生産地単価との比較を行いたいところだが、生産地相場のサンプルが乏しい状況にある。

(b) 納品井類同寸法の生産地単価

明治31年・同35年・同40年の生産地相場には、摺絵(銅版)井類の相場掲載はあるが、銅版転写(本銅版)は一切見られない点が共通している。井類は摺絵製品が銅版転写以上に多く生産されていたと見られる。

(c) 同一寸法納品井類の他装飾商品単価

同店への同一寸法井類の納品例は少ない。僅かに手描5寸井・8～9寸井のサンプルが見られる。5寸井は、明治38年12月1日に日本橋区浜町・森竹次郎が桐5寸井240ケを単価5,32銭で納品した(目録124-5)。8寸井は、同37年6月21日に京橋区南新堀・満留寿商會が亀甲8寸井80ケを単価6銭で納品した。9寸井は、同日に同問屋が亀甲9寸井24ケを単価10銭で納品した(目録124-2-7)他、同39年6月27日には日本橋区蛸殻町・家満加合資会社が9寸井48ケを単価10銭で納品した(目録125-3-3)。同店の印判磁器の全体平均は、5寸井が3,15銭、8寸井が6,93銭、9寸井が12,3銭である。したがって、手描と印判井の単価差は、5寸井では手描が高いが、8～9寸井では印判井と変わらないか、むしろやや印判井が高いことが判る。皿類では他装飾技法(手描・色絵・吹絵等)による納品単価の方が印判皿以上に高い傾向が見られたが、井類では明らかな差異はみられないと判断される。

③ 摺絵・銅版転写碗類(湯呑/煎茶碗・茶漬碗)・爛徳利の仕入

15頁～18頁【表3】を参照されたい。紀の国屋の碗類仕入商品は、小湯呑・湯呑・煎茶碗と茶漬碗(小丸・小平・中丸・中平)がある。この当時、茶用の碗は長筒形の湯呑と煎茶碗が圧倒的な生産量であったとされる。茶漬碗の小丸・小平・中丸といった名称は、形状を表す「反・丸・平」と大きさ表示を組み合わせたものが使用されている⁽¹⁸⁾が、実物との照合はあまり進んでいない。納品個数は、小湯呑が概ね300ケ1単位に2～5セット、湯呑が200～400ケ1単位、煎茶碗が500ケ1単位と120ケ1単位のセット納品の他、400ケ以上の一括セット納品も見られる。一度の煎茶碗の納品数が1000ケを超えるケースもまま見られ、同店の納入品の中では最大個数となっている。茶漬碗の納品個数は、小丸が概ね200ケ1単位、小平が100～300ケ一括、中丸が170ケ1単位複数セット納入、中平が200ケ1単位複数セット納入である。同店の爛徳利の仕入は、全て銅版転写2合燗で、納品個数は120ケ1単位とした例が多い。

(a) 納品碗・爛徳利類の平均単価

小湯呑全体では、明治30年8,38厘、同38年1,07銭である。摺絵小湯呑が1,24銭、銅版転写小湯呑が1,25銭であり、両者の単価差は無い。湯呑は明治37～38年に集中して納品されており、同37年1,73銭、同38年が2,43銭である。銅版転写が1,8銭、青銅版1,85銭、黒銅版1,95銭であり、両者の単価差は無い。煎茶碗全体では、同30年6,63厘、同36年7,7厘、同39年1,2銭である。銅版転写煎茶碗が1,12銭、青銅版煎茶碗が1,39銭であり、両者の差は殆んど無い。

茶漬碗の全体平均は、小丸1,38銭、小平1,7銭、中丸2,57銭、中平2,12銭である。小丸は、銅版小丸の同店への納品は無いため、生産地相場で比較する以外に摺絵との価格差は判らない。小平は、摺絵小平が8,87厘、銅版転写小平が2銭であり、後者が高い。中丸は、摺絵中丸が2,44銭、銅版転写中丸が3,39銭であり、後者が高い。中平は、摺絵中平が1,89銭、銅版転写中平が2,35銭であり、後者が高い。従って、茶漬碗の同店納品単価を見比べれば摺絵よりも銅版転写の単価が高いことが看取される。

爛徳利の全体平均は2,36銭である。同店に納品された徳利は全て銅版転写2合徳利であるが、生産地相場でも摺絵爛徳利の掲載は見られない。

(b) 納品碗・爛徳利類同寸法の生産地単価

湯呑に関しては、生産地の明治31年・同35年相場には掲載されていない。明治40年になって初めて掲載され、銅版転写小湯呑1,6銭とある。紀の国屋への納品単価は1,25銭程度で、両者の差は殆んど無い。煎茶碗も摺絵製品の相場記載は見られず、同35年・同40年相場に銅版転写煎茶碗が見られる。同35年の相場では、銅版転写の反煎茶8,3厘、削煎茶8,5厘、平煎茶1,1銭、丸煎茶1,2銭とある。形状が細分化されていることが窺われる。また同年の生産地相場では、青地煎茶6,5厘、筋絵反煎茶6,8厘とあるので銅版転写は若干単価が高かったようである。

茶漬碗に関して、小丸は摺絵1,8銭、銅版転写1,9銭と後者が高く(明治40年相場)、小平は摺絵1,15銭、銅版転写1,8銭と後者が高く(同35・40年相場)、中丸は摺絵2,2銭、銅版転写3銭と後者が高く(同40年相場)、中平は摺絵1,6銭、銅版転写1,9銭(同35年相場)と後者が高い。要するに茶漬碗は摺絵よりも銅版転写の単価が高かったことが看取される。

爛徳利は、銅版転写2合は同31年・35年相場ともに2,3銭で、同40年には3銭であった。摺絵の相場掲載品は存在せず、両者の単価比較は出来なかった。

(c) 同一寸法納品碗・爛徳利類の他装飾商品単価

同一寸法の他装飾商品には手描・吹絵(ボカシ)・錦(色絵)が比較的多く、明治30年代初頭よりも同38～39年にかけてこれらの商品の納品が増えることが仕切証の整理から窺えた。仕入頻度が複数ある場合、この2年に納品された商品単価の平均値を割り出した。

手描小湯呑は、日本橋区蛸殻町瀧澤政吉・岡嶋善三郎・家満加合資会社が菊・波千鳥・牡丹小湯呑をそれぞれ納品し(目録124-2-3・124-5・125-3-3)、平均1,37銭であった。手描湯呑は、同区南茅場町榊原米五郎が同38年6月に納品した楓帯湯呑単価1,93銭(目録124-5)が参考になる。ボカシ小湯呑は、同区岡嶋善三郎・榊原米五郎が納品し(目録124-2-15・124-5)、平均1,29銭である。ボカシ湯呑は、同区山和商店・榊原米五郎が納品し(目録124-5、130-3-40)、平均2,99銭である。故に、小湯呑の場合、銅版転写と手描では前者の単価が高いが、標準サイズでは手描の方が高いということになり、双方の差に開きは無い。

手描煎茶碗は、京橋区満留寿商会や日本橋区森竹次郎・家満加合資会社・岩田商店がそれぞれ慈光山・濃入牡丹・松竹・唐竹煎茶碗を納品し(目録124-2-10・124-5・125-3-3・125-2)、平均1,6銭である。ボカシ煎茶碗は、日本橋区森竹次郎・山和商店・榊原米五郎・岡嶋善三郎や京橋区満留寿商会がそれぞれ納品し(目録124-5・125-2・125-3-1)、平均1,69銭である。色入煎茶碗は、同39年4月に日本橋区蛸殻町岩田商店が納品した牡丹丸煎茶碗単価4銭(目録125-3-2)が参考になる。従って、手描・吹絵・色絵

の煎茶碗は銅版転写煎茶碗以上に単価が高かったことが明らかになる。

他装飾による茶漬碗の納品は手描のみである。小丸は、明治38年8月に日本橋区榊原米五郎が赤国旗小丸単価1,38銭（目録124-5）、翌年6月に京橋区満留寿商会が赤小丸単価1,3銭（目録125-3-1）で納品した。中丸は、京橋区満留寿商会・大屋初太郎が剣先・花菱中丸を納品し（目録124-2-7・125-2）、平均1,89銭である。中平は、日本橋区家満加合資会社や京橋区満留寿商会・大屋初太郎が獅子・波千鳥・菊・六歌仙・赤海老中平をそれぞれ納品し（目録124-2-3、124-5、125-3-1・125-2）、平均3,89銭である。故に、手描茶漬碗は、銅版転写碗よりも単価が安いもの（小丸・中丸）と逆に銅版転写碗より単価が高いもの（中平）が存在していると言える。

他装飾による爛徳利の納品も手描のみである。明治30年2月・7月には日本橋区瀧澤政吉が墨流2合爛・雲鶴2合爛を納品し（目録43・56）、平均1,73銭であり、銅版転写の方が単価は高い。

結びにかえて

本稿では近代美濃磁器の量産技法である摺絵と銅版転写に着目し、佐原紀の国屋の仕切証納品単価と生産地相場、及び、同商店の他技法同一法量商品との比較を行った。分析結果として重要な点は、皿類・煎茶碗では他装飾技法（手描・色絵・吹絵等）による納品単価が印判以上に高いが、井類では明らかな差異はみられなかったことである。そして、銅版転写の方が手描以上に単価が高い小湯呑と手描の方が高い標準サイズの湯呑や、手描が銅版転写よりも安い小丸・中丸と手描が銅版転写碗より高い中平といった茶漬碗の存在により、一概に印判磁器が最も低廉製品であったとは言い切れないことが判明した。加えて、爛徳利のように銅版転写よりも手描の方が単価の安い器種も存在しており、生産の省力化だけが価格決定の最大因子ではないことが窺える。この事実は、価格相場の要求として需給バランスや東京中央区卸問屋の在庫の多寡、さらには当時のトレンドなど幾つか複合的に考え合わせなければならないことを窺せるものであろう。

近代美濃磁器研究では、量産期の「最廉価品」とされる製品中でも単価が高価なものとそうでないものとの間に微妙な差が存在していることにも注目すべきであると考ええる。さらに、他技法による同寸量の製品との価格差からも印判磁器が相対的にどの位置にあるのかを検証することで、何が「最廉価品」の中で「高価」であったのかが浮き彫りになってくるのである。この点を鑑みると、山下峰司も言及するように摺絵・銅版転写製品が「廉価大量生産品として定着し、従前の製品を駆逐するまでには時間がかかった」⁽¹⁹⁾という指摘は重要であり、技法的な始源と終期の問題と併せて、量産製品として定着する過程での価格面の検討にも何らかの意義を持つと考える。今後は大正期の分析も継続することで、その変容する様相を検討したい。

註

- (1) 佐々木達夫 1987「江戸へ流通した陶磁器とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』14、後藤宏樹 1992「江戸遺跡出土土器の変化と特質」『國學院雑誌』93-12、長佐古真也 2002「「お茶碗」考—江戸における量産陶磁器の変遷—」『国立歴史民俗博物館研究報告』94、等。

- (2) 仲野泰裕 1994「19世紀の窯業 ―伝統と西欧技術の受容―」『化学史研究』21。
- (3) 成瀬晃司・堀内秀樹・辻 真人・瀬川裕市郎 2000「大正2年の火災で焼失したセトモノ屋の店先」『沼津市歴史民俗資料館資料集』17。
- (4) 実際の記年銘小皿の例から、銅版転写も明治20年(1887)には始まったという指摘がある(河合竹彦 2006「明治時代に焼かれたやきもの美濃印判の記年銘について」『瑞浪陶磁資料館研究紀要』11)。
- (5) 山下峰司 2014「近代美濃焼の“銅版・本銅版”―明治・大正・昭和のやきもの相場」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』18。
- (6) 内川隆志編 2016『地域文化遺産の再生に関する総合的研究(二) ―千葉県香取市佐原紀の国屋大蔵の保存と活用―(成果報告書)』(科研基盤研究C 課題番号 25350395)。
- (7) 幕末期に紀州箕島陶器商人は、仕切金回収や運転資金融資等で藩の介入と保護を受け、江戸の有田焼独占販売機構として機能した。同商人は、廻船問屋紀伊国屋久兵衛(鉄砲洲船松町)を拠点に江戸と関東一円に行商した(山形万里子 2008『藩陶器専売制と中央市場』日本経済評論社)。
- (8) 紀の国屋佐山家文書目録番号12「建家及土蔵貸渡証」。
- (9) 拙稿 2016「卸小売商店における明治期の陶磁器仕入」内川隆志編 2016『地域文化遺産の再生に関する総合的研究(二) ―千葉県香取市佐原紀の国屋大蔵の保存と活用―(成果報告書)』(科研基盤研究C 課題番号 25350395)。
- (10) 斎藤豊次郎は、明治16年(1883)に日本橋浜町の魚市場の跡地を利用して社屋500坪・倉庫10棟を擁する陶業会社を設立した。同社は、後に山和商店を創業する加藤石松ら数名で起業し明治26年(1893)株式会社に変わった。会社の繁栄は『日本橋総覧』(日本魁新聞社、1939年)に詳しい。
- (11) 美濃市之倉で生まれた加藤助三郎は、明治22年(1889)に満留寿会社を創業し、美濃多治見にあった本店から輸送された美濃焼及び各地の陶磁器を卸販売した。同25年(1892)には東京陶器問屋組合の頭取兼副頭取に就任するとともに、大日本窯業協会には役員として関与する等、業界で広く活躍した(今給黎佳菜 2010「近代陶磁器業における業界新聞 ―『陶器商報』について―」『人間文化創成科学論叢』13)。
- (12) 白石 孝 2000「日本橋浜町2・3丁目商業史覚書」『三田商学研究』43-5。
- (13) 三井弘三 1979『概説近代陶業史』日本陶業連盟。
- (14) 東濃西部歴史民俗資料館編 2005『特別展 美濃近代窯業の記憶』瑞浪陶磁資料館。
- (15) 前掲註(4)河合論文。
- (16) 冨永樹之 2001「近代の染付飯茶碗の変遷 ―現代飯碗の起源―」『青山考古』18。
- (17) 山下峰司 2015「近代日常食器生産とその製品」『考古学ジャーナル』675。
- (18) 同上。
- (19) 註(5)に同じ。

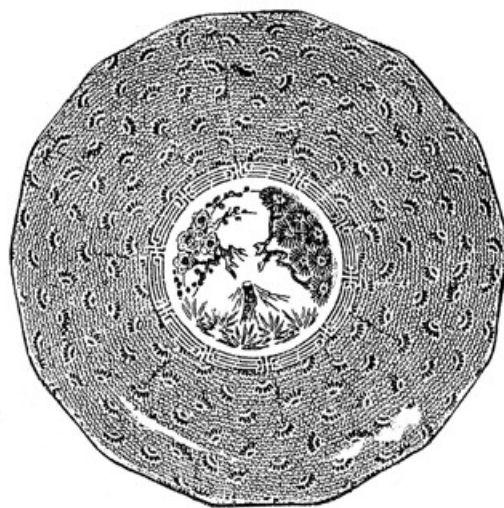
武蔵村山市立歴史民俗資料館 学芸員



摺絵花鳥文皿

口径 36.2cm 器高 4.8cm 高台径 17.3cm

図版1 『特別展 美濃近代窯業の記憶』
11頁38図より転載



摺絵花唐草文輪花皿

口径 29.6cm 器高 4.5cm 高台径 14.7cm

図版2 左に同じ 11頁35図より転載



銅版人物図皿

口径 25.9cm 器高 3.6cm 高台径 13.5cm

図版3 『特別展 美濃近代窯業の記憶』
25頁86図より転載



銅版人物図角皿

「HIBINO SEIZO JAPAN DACHI」(駄知)
口径 23.9cm 器高 4.2cm 高台径 12.0cm

図版4 左に同じ 25頁87図より転載



【表1】紀の国屋における摺絵・銅版転写の皿類仕入

品目	年月日	総数	合計額	単価	仕入陶磁器問屋/摘要 ※〈括弧〉内は目録番号
本銅判深小皿	明治37年3月20日	300ヶ	4円20銭	1,4銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎 〈118-2〉
本銅判菊絵3寸5分皿	明治30年5月18日	300ヶ	2円82銭	9,4厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈46〉
銅判捻3寸5分皿	明治30年8月26日	600ヶ	5円58銭	9,3厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈60〉, 藁包300ヶ入×2
本銅判帯3寸5分皿	明治30年12月2日	600ヶ	6円	1銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈67〉, 藁包300ヶ入×2
本銅判朝顔3寸5分皿	明治36年8月21日	300ヶ	3円15銭	1,05銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈130-3-20〉
本銅判竹虎3寸5分皿	明治36年9月4日	300ヶ	2円85銭	9,5厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈130-3-20〉
銅判3寸5分皿	明治37年2月7日	300ヶ	2円40銭	8厘	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈118-2〉
銅判3寸5分皿	明治37年7月6日	300ヶ	2円30銭	7,7厘	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 〈118-4-6〉
青銅判龍3寸5分皿	明治37年8月8日	300ヶ	3円	1,0銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈118-2〉
青銅判四君子3寸5分皿	明治37年9月12日	300ヶ	2円70銭	9厘	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 〈118-4-6〉
本銅判松3寸5分皿	明治37年9月12日	300ヶ	2円70銭	9厘	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 〈118-4-6〉
銅判3寸5分皿	明治37年9月13日	300ヶ	2円34銭	7,8厘	東京市日本橋区浜町2-11 濃栄合資会社 〈118-2〉
本銅判竹虎3寸5分皿	明治37年12月11日	300ヶ	2円85銭	9,5厘	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈118-2〉
銅判3寸5分皿	明治38年1月10日	300ヶ	3円75銭	1,25銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈130-3-13〉
銅判割3寸5分皿	明治38年4月12日	300ヶ	2円52銭	8,4厘	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社 〈124-5〉
銅判3寸5分皿	明治38年9月1日	300ヶ	3円24銭	1,08銭	東京市日本橋区浜町2-11 濃栄合資会社 〈124-2-2〉
銅判桜馬3寸5分皿	明治38年9月2日	300ヶ	3円30銭	1,1銭	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎 〈124-2-10〉
本銅判竹3寸5分皿	明治38年10月12日	300ヶ	4円5銭	1,35銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈124-5〉
本銅判桜3寸5分皿	明治39年2月16日	300ヶ	4円35銭	1,45銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎 〈125-2〉
本銅板3寸5分皿	明治39年4月3日	300ヶ	4円20銭	1,4銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈125-3-1〉
本銅判捻3寸5分皿	明治39年6月27日	300ヶ	4円35銭	1,45銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田昇一商店 〈125-3-2〉
青銅判龍3寸5分皿	明治39年6月27日	300ヶ	4円35銭	1,45銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田昇一商店 〈125-3-2〉
銅判3寸5分皿	明治39年6月27日	300ヶ	3円75銭	1,25銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社 〈125-3-3〉
銅判割3寸5分皿	明治39年10月17日	200ヶ	6円77銭	3,39銭	東京市牛込区肴町38 鶴見藤吉 〈130-3-41〉
本銅判花鳥4寸皿	明治30年1月5日	200ヶ	3円20銭	1,6銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈56〉
銅判人物4寸皿	明治30年7月5日	400ヶ	4円80銭	1,2銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈58〉, 藁包200ヶ入×2
銅判人物4寸皿	明治30年8月26日	400ヶ	4円28銭	1,07銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈60〉, 藁包200ヶ入×2
銅判4寸皿	明治36年9月4日	200ヶ	2円60銭	1,3銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈130-3-20〉
銅判4寸皿	明治37年9月13日	200ヶ	2円	1銭	東京市日本橋区浜町2-11 濃栄合資会社 〈118-2〉
本銅判松竹梅4寸皿	明治37年9月25日	200ヶ	5円92銭	2,96銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田昇一 〈118-4-1〉
本銅判月見4寸皿	明治38年8月2日	200ヶ	3円	1,5銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田昇一商店 〈124-5〉
本銅判口紅兎4寸皿	明治38年8月16日	200ヶ	3円	1,5銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎 〈124-5〉
銅判麦4寸皿	明治38年9月1日	300ヶ	2円80銭	9,33厘	東京市日本橋区浜町2-11 濃栄合資会社 〈124-2-2〉
銅判4寸皿	明治38年9月1日	200ヶ	3円	1,5銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈124-2-7〉
本銅判月兎4寸皿	明治38年10月12日	400ヶ	6円20銭	1,55銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈124-5〉, 藁包200ヶ入×2
本銅判4寸皿	明治39年1月10日	100ヶ	1円35銭	1,35銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 〈125-3-11〉
本銅判4寸皿	明治39年3月28日	100ヶ	2円95銭	2,95銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎 〈125-2〉
本銅判割4寸皿	明治39年4月3日	200ヶ	3円60銭	1,8銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 〈125-3-11〉
本銅判浪鶴4寸皿	明治39年6月28日	400ヶ	6円80銭	1,7銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈125-3-6〉, 藁包200ヶ入×2
本銅判流4寸5分皿	明治30年2月22日	180ヶ	3円60銭	2銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈52〉
銅判人物4寸5分皿	明治30年10月2日	450ヶ	6円60銭	1,47銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈64〉, 藁包150ヶ入×3
本銅判異風5寸皿	明治30年2月22日	20ヶ	1円36銭	6,8銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈52〉
本銅判内外立花5寸皿	明治30年8月26日	100ヶ	3円35銭	3,35銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈60〉
茶銅判5寸皿	明治30年10月2日	90ヶ	3円60銭	4銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈64〉
本銅判5寸皿	明治30年10月2日	218ヶ	5円	2,29銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈64〉, 藁包109ヶ入×2
本銅判唐竹蓐5寸皿	明治30年10月11日	100ヶ	3円30銭	3,3銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈65〉
本銅判山水5寸皿	明治30年10月11日	100ヶ	3円25銭	3,25銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈65〉
本銅判龜5寸皿	明治30年12月2日	100ヶ	3円30銭	3,3銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈67〉
本銅判氷丸5寸皿	明治30年12月2日	100ヶ	3円30銭	3,3銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈67〉
本銅判唐花5寸皿	明治30年12月16日	100ヶ	3円40銭	3,4銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈43〉
本銅判5寸肉皿	明治36年10月9日	480ヶ	6円24銭	1,3銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈130-3-20〉, 藁包下物160ヶ入×3
本銅判5寸皿	明治37年9月25日	100ヶ	4円30銭	4,3銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田昇一 〈118-4-1〉
青銅判5寸皿	明治38年2月5日	200ヶ	3円60銭	1,8銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎 〈124-2-15〉
青銅判5寸皿	明治38年10月16日	200ヶ	6円3銭	3,15銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎 〈124-5〉

銅判角切6寸皿	明治30年5月28日	90ヶ	2円88銭	3,2銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈45〉
本銅判6寸肉皿	明治36年10月9日	600ヶ	12円40銭	2,07銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈130-3-20〉, 藁包下物120ヶ入×5
本銅判木瓜6寸皿	明治37年9月28日	90ヶ	2円56銭	2,84銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈118-4-6〉
本銅判6寸皿	明治37年12月7日	100ヶ	8円	8銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈118-2〉
本銅判6寸皿	明治37年12月7日	100ヶ	8円	8銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-2〉
本銅判角6寸皿	明治37年12月25日	100ヶ	2円43銭	2,43銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田昇一〈118-2〉
本銅判6寸皿	明治38年10月14日	100ヶ	3円30銭	3,3銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎〈124-5〉
本銅判薄用7寸皿	明治30年5月28日	120ヶ	5円28銭	4,4銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈45〉, 藁包60ヶ入×2
本銅判小判形7寸皿	明治30年5月28日	120ヶ	6円	5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈45〉
銅判捻7寸皿	明治30年10月11日	300ヶ	8円25銭	2,75銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈65〉, 藁包60ヶ入×5
本銅判7寸肉皿	明治36年10月9日	350ヶ	13円20銭	3,77銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈130-3-20〉, 藁包下物70ヶ入×5
青地山水銅判7寸皿	明治37年2月1日	50ヶ	3円75銭	7,5銭	東京市深川区牡丹町 雑貨卸商 岩田久七商店〈118-2〉
銅判7寸皿	明治37年12月3日	180ヶ	5円76銭	3,2銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-2〉, 藁包60ヶ入×3
銅判7寸皿	明治38年1月20日	136ヶ	3円96銭	2,91銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈124-5〉, 藁包68ヶ入×2
銅判7寸皿	明治38年9月1日	180ヶ	5円76銭	3,2銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-2-7〉, 藁包60ヶ入×3
本銅判7寸皿	明治38年11月24日	120ヶ	4円80銭	4銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-5〉, 藁包60ヶ入×2
銅判丸7寸皿	明治38年12月1日	300ヶ	12円60銭	4,2銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈124-5〉, 藁包60ヶ入×5
銅判捻8寸皿	明治30年3月8日	80ヶ	3円	3,75銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈62〉, 藁包40ヶ入×2
本銅判角8寸皿	明治30年5月28日	40ヶ	2円72銭	6,8銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈45〉
銅判捻8寸皿	明治30年8月26日	120ヶ	4円95銭	4,13銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈60〉, 藁包40ヶ入×3
銅判8寸皿	明治37年2月7日	88ヶ	4円22銭	9,6銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈118-2〉
本銅判松竹8寸皿	明治37年9月12日	44ヶ	4円66銭	10,6銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈118-4-6〉
銅判8寸皿	明治37年12月3日	132ヶ	5円94銭	4,5銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-2〉, 藁包44ヶ入×3
銅判8寸皿	明治38年1月10日	88ヶ	5円10銭	5,8銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈130-3-13〉, 藁包44ヶ入×2
銅判朝日8寸皿	明治38年9月1日	88ヶ	4円22銭	4,8銭	東京市日本橋区浜町2-11 濃栄合資会社〈124-2-2〉
銅判8寸皿	明治38年11月22日	88ヶ	5円28銭	6銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-5〉, 藁包44ヶ入×2
銅判8寸皿	明治39年4月3日	44ヶ	2円64銭	6銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈125-3-1〉
銅判牡丹8寸皿	明治39年4月3日	88ヶ	5円10銭	5,8銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈125-3-11〉, 藁包44ヶ入×2
本銅判薄用8寸皿	明治39年10月5日	90ヶ	6円16銭	6,84銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈125-3-1〉, 藁包45ヶ入×2
本銅判長角8寸皿	明治39年10月21日	40ヶ	4円60銭	11,5銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎〈125-2〉
銅判竹霞9寸皿	明治37年9月12日	22ヶ	2円1銭	9,55銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-4-3〉
本銅判薄用9寸皿	明治38年9月27日	32ヶ	2円81銭	8,78銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈124-5〉
本銅判薄用9寸皿	明治38年11月22日	60ヶ	5円76銭	9,6銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-5〉, 藁包30ヶ入×2
本銅判角尺皿	明治37年1月9日	30ヶ	2円80銭	9,33銭	東京市深川区牡丹町 雑貨卸商 岩田久七商店〈118-2〉
銅判鯉絵尺皿	明治37年9月12日	24ヶ	2円40銭	10銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-4-3〉
銅判山水角尺皿	明治38年5月27日	20ヶ	2円90銭	14,5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-1 岩井松之助〈124-5〉
本銅判尺皿	明治38年9月1日	22ヶ	2円64銭	12銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-2-7〉
本銅判貝絵生盛	明治30年5月28日	120ヶ	4円56銭	3,8銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈45〉, 藁包60ヶ入×2
銅判生盛	明治30年10月2日	240ヶ	7円70銭	3,21銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈64〉, 藁包120ヶ入×2
銅判薄用生盛	明治36年9月4日	260ヶ	4円55銭	1,75銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈130-3-20〉, 藁包130ヶ入×2
銅判薄用生盛	明治37年2月7日	120ヶ	2円28銭	1,9銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈118-2〉
銅判薄用生盛	明治37年10月19日	120ヶ	2円28銭	1,9銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈118-2〉
銅判鳥生盛	明治38年2月13日	280ヶ	4円34銭	1,55銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈124-5〉, 藁包140ヶ入×2
本銅判牡丹生盛	明治38年9月1日	240ヶ	6円48銭	2,7銭	東京市日本橋区浜町3-1 山和商店〈124-2-2〉, 藁包120ヶ入×2

本銅判牡丹中生盛	明治38年1月24日	240ヶ	7円68銭	3,2銭	東京市日本橋区蛸殻町 1-4 家満加合資会社 (124-5), 藁包120ヶ入×2
本銅判中生盛	明治39年4月8日	120ヶ	3円84銭	3,2銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 (125-2)
銅判薄用大生盛	明治37年2月1日	180ヶ	4円23銭	2,35銭	東京市深川区牡丹町 雑貨卸商 岩田久七商店 (118-2)
銅判薄用大生盛	明治37年12月11日	180ヶ	4円23銭	2,35銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 (118-2), 藁包90ヶ入×2
銅判捻大生盛	明治38年9月27日	200ヶ	5円	2,5銭	東京市日本橋区浜町 2 丁目 山和商店 (124-5), 藁包100ヶ入×2
銅判大生盛	明治39年12月8日	270ヶ	8円34銭	3,09銭	東京市日本橋区浜町 3 - 1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 (126-14-5), 藁包90ヶ入×3

【表2】 紀の国屋における摺絵・銅判転写の井類仕入

品目	年月日	総数	合計額	単価	仕入陶磁器問屋/摘要 ※〈括弧〉内は目録番号
銅判5寸井	明治37年10月19日	80ヶ	2円56銭	3,2銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 (118-2)
本銅判捻5寸井	明治39年4月3日	100ヶ	3円10銭	3,1銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田昇一商店 (125-3-2)
本銅判小判形6寸井	明治30年5月28日	90ヶ	3円15銭	3,5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (45)
本銅判鳥見込玉淵6寸井	明治30年5月28日	50ヶ	2円75銭	5,5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (45)
銅判6寸井	明治37年7月6日	60ヶ	1円80銭	3銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (118-4-10)
銅判6寸井	明治37年7月6日	60ヶ	1円80銭	3銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 (118-4-6)
銅判6寸井	明治37年8月4日	70ヶ	2円31銭	3,3銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 (124-5)
銅判瓢箪6寸井	明治38年6月22日	100ヶ	3円80銭	3,8銭	東京市日本橋区浜町 2 丁目 山和商店 (124-2-2), 藁包50ヶ入×2
銅判角7寸井	明治30年7月4日	138ヶ	4円83銭	3,5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (43), 藁包46ヶ入×3
本銅判桔梗絵玉淵7寸井	明治30年7月4日	96ヶ	4円80銭	5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (43), 藁包48ヶ入×2
本銅判7寸井	明治37年8月4日	46ヶ	2円43銭	5,28銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 (124-5)
本銅判捻丸7寸井	明治39年6月28日	88ヶ	4円84銭	5,5銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 (125-3-6), 藁包44ヶ入×2
銅判亀甲7寸5分井	明治30年7月4日	100ヶ	4円50銭	4,5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (43), 藁包50ヶ入×2
銅判瓢8寸井	明治36年7月21日	36ヶ	2円34銭	6,5銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 (130-3-13)
銅判扇8寸井	明治36年7月22日	88ヶ	4円84銭	5,5銭	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎 (130-3-26), 藁包44ヶ入×2
銅判角8寸井	明治37年6月22日	72ヶ	4円32銭	6銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店 (124-2-2)
銅判松竹梅角8寸井	明治37年9月2日	40ヶ	2円60銭	6,5銭	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎 (124-2-10)
本銅判8寸井	明治39年6月27日	40ヶ	3円20銭	8銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社 (125-3-3)
本銅判8寸井	明治39年8月1日	120ヶ	9円	7,5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (125-3-14), 藁包40ヶ入×3
本銅判花鳥8寸井	明治39年8月15日	80ヶ	6円80銭	8,5銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社 (125-2)
本銅判角9寸井	明治36年7月22日	22ヶ	4円18銭	19銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (130-3-20)
本銅判青牡丹9寸井	明治37年7月6日	24ヶ	2円16銭	9銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 (118-4-3)
本銅判牡丹9寸井	明治37年7月6日	40ヶ	3円60銭	9銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 (118-4-18)
本銅判尺井	明治37年7月6日	16ヶ	2円40銭	15銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 (118-4-3)
銅判角尺井	明治39年6月28日	36ヶ	5円58銭	15,5銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 (125-3-6), 藁包18ヶ入×2

【表3】 紀の国屋における摺絵・銅判転写の碗・燗類仕入

品目	年月日	総数	合計額	単価	仕入陶磁器問屋/摘要 ※〈括弧〉内は目録番号
本銅判小湯呑	明治30年1月5日	600ヶ	5円50銭	9,17厘	東京市日本橋区蛸殻町 2-14 瀧澤政吉 (56), 藁包 300ヶ入×2
本銅判松絵小湯呑	明治30年7月4日	600ヶ	4円80銭	8厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 (58), 藁包300ヶ入×2
銅判捻小湯呑	明治30年7月4日	300ヶ	2円25銭	7,5厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 (58)
本銅判小湯呑	明治30年7月4日	600ヶ	5円40銭	9厘	東京市日本橋区蛸殻町 1 - 3 濃栄合名会社 (59), 藁包300ヶ入×2
本銅判立花小湯呑	明治30年7月5日	600ヶ	4円98銭	8,3厘	東京市日本橋区蛸殻町 1 - 3 濃栄合名会社 (57), 藁包300ヶ入×2
本銅判小湯呑	明治36年7月22日	600ヶ	8円82銭	1,47銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 (130-3-20), 藁包300ヶ入×2
銅判雲鶴小湯呑	明治36年7月22日	600ヶ	4円8銭	6,8厘	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎 (130-3-26), 藁包300ヶ入×2
本銅判松鶴小湯呑	明治36年7月22日	700ヶ	8円	1,14銭	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎 (130-3-26), 藁包350ヶ入×2

本銅判梅小湯呑	明治36年7月22日	300ヶ	2円67銭	8,9厘	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎〈130-3-26〉
銅判筋小湯呑	明治36年8月21日	300ヶ	6円90銭	2,3銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈130-3-20〉
本銅判松竹梅削小湯呑	明治37年3月10日	300ヶ	3円90銭	1,3銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎〈118-2〉
本銅判松竹梅小湯呑	明治37年3月10日	202ヶ	2円32銭	1,19銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎〈118-2〉
赤銅判小湯呑	明治37年3月10日	104ヶ	2円8銭	2銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎〈118-2〉
黒銅判小湯呑	明治37年7月6日	900ヶ	5円85銭	6,5厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈118-4-8〉, 藁包300ヶ入×3
本銅判菊小湯呑	明治37年7月6日	300ヶ	12円24銭	4,08銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-4-3〉
黒銅判小湯呑	明治37年7月25日	200ヶ	1円65銭	8,25厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈118-4-8〉
本銅判煙竹小湯呑	明治37年8月2日	1500ヶ	10円20銭	6,8厘	東京市日本橋区蛸殻町1-3 濃栄合名会社〈118-2〉, 藁包300ヶ入×5
本銅判杉山水削小湯呑	明治38年3月17日	300ヶ	3円60銭	1,2銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎〈124-5〉
本銅判小湯呑	明治38年6月3日	500ヶ	2円60銭	5,2厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-5〉
本銅判削小湯呑	明治38年6月7日	900ヶ	10円36銭	1,15銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈124-5〉, 藁包300ヶ入×3
本銅判松竹梅削小湯呑	明治38年6月22日	1000ヶ	13円33銭	1,33銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈124-5〉, 藁包500ヶ入×2
本銅判帯削小湯呑	明治38年6月22日	300ヶ	2円93銭	9,76厘	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈124-5〉
本銅判小湯呑	明治38年7月21日	360ヶ	2円88銭	8厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-5〉
本銅判小湯呑	明治38年10月16日	600ヶ	9円	1,5銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎〈124-5〉, 藁包300ヶ入×2
本銅判湯呑	明治30年7月4日	220ヶ	3円63銭	1,65銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈43〉
本銅判扇削湯呑	明治37年7月6日	200ヶ	3円40銭	1,7銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-4-3〉
黒銅判湯呑	明治37年7月6日	300ヶ	5円85銭	1,95銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈118-4-6〉
本銅判鶴削湯呑	明治37年9月12日	200ヶ	3円10銭	1,55銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈118-4-6〉
青銅判湯呑	明治38年2月19日	200ヶ	3円70銭	1,85銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎〈124-5〉
赤銅判松鶴湯呑	明治38年7月6日	200ヶ	6円	3銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田(昇一)商店〈124-5〉
本銅判色入湯呑	明治39年6月28日	400ヶ	9円20銭	2,3銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈125-3-6〉, 藁包200ヶ入×2
本銅判削煎茶碗	明治30年5月18日	500ヶ	3円25銭	6,5厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈46〉
本銅判猩々煎茶碗	明治30年7月4日	1000ヶ	5円	5厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈58〉, 藁包500ヶ入×2
本銅判松絵煎茶碗	明治30年7月4日	1500ヶ	7円50銭	5厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈58〉, 藁包500ヶ入×3
本銅判人物平煎茶碗	明治30年7月5日	450ヶ	3円73銭	8,29厘	東京市日本橋区蛸殻町1-3 濃栄合名会社〈57〉
本銅判鶴削煎茶碗	明治30年10月2日	500ヶ	3円58銭	7,16厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈43〉
本銅判唐子削煎茶碗	明治30年12月2日	450ヶ	3円60銭	8厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈67〉
本銅判四君子煎茶碗	明治36年7月21日	1000ヶ	7円20銭	7,2厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈130-3-13〉, 藁500ヶ入×2
本銅判平煎茶碗	明治36年7月21日	400ヶ	4円	1銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈130-3-13〉
本銅判水仙反煎茶碗	明治36年7月22日	500ヶ	2円50銭	5厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈130-3-20〉
本銅判風月平煎茶碗	明治36年7月22日	900ヶ	8円10銭	9厘	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎〈130-3-26〉, 藁包450ヶ入×2
青銅判反煎茶碗	明治36年7月22日	500ヶ	3円65銭	7,3厘	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎〈130-3-26〉
青銅判削煎茶碗	明治37年7月6日	1000ヶ	4円80銭	4,8厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈118-4-8〉, 藁包500ヶ入×2
本銅判松竹梅削煎茶碗	明治37年7月6日	500ヶ	2円50銭	5厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-4-3〉
青銅判削煎茶碗	明治37年7月6日	500ヶ	4円80銭	9,6厘	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈118-4-6〉
本銅判亀絵平煎茶碗	明治37年7月6日	400ヶ	3円80銭	9,5厘	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈118-4-18〉
青銅判削煎茶碗	明治37年7月25日	500ヶ	3円35銭	6,7厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈118-4-8〉
本銅判丸煎茶碗	明治37年9月12日	400ヶ	4円80銭	1,2銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈118-4-6〉
本銅判帯絵煎茶碗	明治38年1月10日	240ヶ	7円56銭	3,15銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈130-3-13〉
本銅判帶玉淵煎茶碗	明治38年1月23日	360ヶ	8円20銭	2,28銭	東京市日本橋区南茅場町57 榊原米五郎〈124-5〉
本銅判縁削煎茶碗	明治38年2月5日	120ヶ	3円	2,5厘	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎〈124-2-15〉
青銅判菊水削煎茶碗	明治38年2月13日	550ヶ	2円70銭	4,9厘	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈124-5〉
本銅判玉淵帶煎茶碗	明治38年4月2日	360ヶ	8円64銭	2,4銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家滴加合資会社〈124-5〉
青銅判煎茶碗	明治38年4月11日	500ヶ	3円25銭	6,5厘	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈124-5〉
本銅判紗綾帶煎茶碗	明治38年5月16日	120ヶ	3円	2,5銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-5〉
青銅判松竹梅反煎茶碗	明治38年6月22日	1000ヶ	6円20銭	6,2厘	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈124-5〉, 藁包500ヶ入×2
本銅判松煎茶碗	明治38年9月1日	1000ヶ	7円	7厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-2-7〉, 藁包500ヶ入×2
青銅判煎茶碗	明治39年1月27日	500ヶ	4円75銭	9,5厘	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎〈125-2〉
本銅判松鶴煎茶碗	明治39年2月13日	400ヶ	5円	1,25銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈125-2〉

本銅判松竹梅煎茶碗	明治39年2月13日	400ヶ	5円46銭	1,37銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈125-2〉
黒銅判丸煎茶碗	明治39年3月28日	240ヶ	4円20銭	1,75銭	東京市日本橋区南茅場町57 榎原米五郎〈125-2〉
本銅判煎茶碗	明治39年4月3日	500ヶ	4円75銭	9,5厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈125-3-1〉
本銅判垣菊煎茶碗	明治39年6月27日	840ヶ	11円10銭	1,32銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田(昇一) 商店〈125-3-2〉
本銅判色入桐煎茶碗	明治39年6月28日	1000ヶ	10円	1銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈125-3-6〉, 藁包500ヶ入×2
本銅判糸瓜反煎茶碗	明治39年12月8日	500ヶ	5円	1銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈126-14-5〉
銅判小丸	明治30年7月4日	200ヶ	2円20銭	1,1銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈43〉
銅判小丸	明治36年9月4日	200ヶ	2円40銭	1,2銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈130-3-20〉
銅判小丸	明治37年9月13日	200ヶ	2円70銭	1,35銭	東京市日本橋区蛸殻町1-3 濃栄合名会社〈118-2〉
銅判捻小丸	明治38年9月1日	200ヶ	3円	1,5銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-2-7〉
赤銅判小丸	明治39年10月4日	300ヶ	4円35銭	1,45銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社〈125-2〉
銅判小丸	明治39年10月5日	200ヶ	3円40銭	1,7銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈125-3-1〉
本銅判小平	明治38年6月22日	160ヶ	3円20銭	2銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈124-2-2〉
銅判桐小平	明治39年6月28日	300ヶ	2円66銭	8,87厘	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈125-3-1〉, 藁包150ヶ入×2
本銅判国旗小平	明治39年12月8日	100ヶ	2円22銭	2,22銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈126-14-5〉
銅判蘇鉄大振中丸	明治30年1月5日	300ヶ	4円20銭	1,4銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈56〉, 藁包150ヶ入×2
銅判唐花中丸	明治30年2月22日	170ヶ	3円85銭	2,26銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈56〉
銅判鶴中丸	明治30年7月5日	1700ヶ	21円20銭	1,25銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈58〉, 藁包170ヶ入×10
本銅判地紙中丸	明治30年12月2日	480ヶ	8円19銭	1,71銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈67〉, 藁包160ヶ入×3
本銅判剣先中丸	明治30年12月2日	480ヶ	6円86銭	1,43銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈67〉, 藁包160ヶ入×3
銅判中丸	明治36年9月4日	850ヶ	7円3銭	8,27厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈130-3-20〉, 藁包170ヶ入×5
銅判薄用中丸	明治37年1月10日	170ヶ	4円93銭	2,9銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈118-4-8〉
銅判桜中丸	明治37年2月7日	170ヶ	5円32銭	3,13銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈118-2〉
銅判中丸	明治37年7月6日	1700ヶ	22円10銭	1,3銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈118-4-8〉, 藁包170ヶ入×10
銅判剣先中丸	明治37年7月6日	170ヶ	11円22銭	6,6銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-4-3〉
本銅判松竹梅中丸	明治37年7月6日	160ヶ	6円24銭	3,9銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈118-4-3〉, 藁包170ヶ入×2
銅判中丸	明治37年7月11日	850ヶ	10円88銭	1,28銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈118-2〉, 藁包170ヶ入×5
銅判中丸	明治37年7月24日	100ヶ	3円	3銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉〈118-2〉
銅判中丸	明治38年4月12日	340ヶ	5円27銭	1,55銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社〈124-5〉, 藁包170ヶ入×2
本銅判中丸	明治38年5月16日	170ヶ	8円16銭	4,8銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-5〉
本銅判牡丹中丸	明治38年6月21日	320ヶ	6円40銭	2銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈124-2-7〉, 藁包160ヶ入×2
銅判牡丹中丸	明治38年6月22日	1020ヶ	15円81銭	1,55銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈124-2-2〉, 藁包170ヶ入×6
銅判桐中丸	明治38年6月22日	170ヶ	2円63銭	1,58銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈124-2-2〉
銅判中丸	明治38年6月22日	700ヶ	26円35銭	3,76銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社〈125-2〉, 藁包70ヶ入×10
銅判中丸	明治38年9月2日	850ヶ	14円87銭	1,75銭	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎〈124-2-10〉, 藁包170ヶ入×5
銅判梅中丸	明治38年10月3日	170ヶ	3円23銭	1,9銭	東京市日本橋区浜町2丁目 山和商店〈124-5〉
銅判中丸	明治39年1月10日	540ヶ	11円32銭	2,1銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈125-2〉, 藁包170ヶ入×3
銅判菱中丸	明治39年4月3日	340ヶ	6円63銭	1,95銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈125-3-1〉, 藁包170ヶ入×3
本銅判松竹梅中丸	明治39年6月28日	340ヶ	8円84銭	2,6銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会〈125-3-1〉
銅判牡丹中丸	明治39年6月28日	850ヶ	17円25銭	2,03銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈125-3-6〉, 藁包170ヶ入×5
銅判中丸	明治39年10月4日	360ヶ	7円74銭	2,15銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社〈125-2〉, 藁包180ヶ入×2
銅判剣先中丸	明治39年10月12日	120ヶ	2円58銭	2,15銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社〈125-3-3〉
銅判国旗中丸	明治39年10月17日	100ヶ	9円45銭	9,45銭	東京市牛込区肴町38 鶴見藤吉〈130-3-41〉
銅判中丸	明治39年11月30日	340ヶ	7円82銭	2,3銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎〈125-2〉, 藁包170ヶ入×2

銅判唐花中平	明治30年2月22日	200ヶ	4円60銭	2,3銭	東京市日本橋区蛸殻町 2-14 瀧澤政吉 〈56〉, 藁包 100ヶ入×2
銅判浪千鳥中平	明治30年3月8日	200ヶ	3円70銭	1,85銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈55〉, 藁包100ヶ入×2
銅判鶴中平	明治30年7月5日	400ヶ	4円80銭	1,2銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈58〉, 藁包200ヶ入×2
銅判中平	明治36年7月22日	600ヶ	6円42銭	1,07銭	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎 〈130-3-26〉, 藁包200ヶ入×3
本銅判松竹梅中平	明治36年7月22日	200ヶ	3円70銭	1,85銭	東京市京橋区東湊町1-11 大屋初太郎 〈130-3-26〉
本銅判松竹梅中平	明治36年9月4日	400ヶ	3円40銭	8,5厘	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈130-3-20〉, 藁包200ヶ入×2
銅判中平	明治37年4月9日	100ヶ	2円70銭	2,7銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 岡嶋善三郎 〈118-2〉
銅判楓中平	明治37年7月6日	220ヶ	8円58銭	3,9銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈118-4-3〉
本銅判菊絵中平	明治37年8月24日	400ヶ	4円80銭	1,2銭	東京市深川区牡丹町 1 丁目 岩田商店 〈118-2〉, 藁包200ヶ入×2
銅判唐子中平	明治37年10月15日	400ヶ	6円	1,5銭	東京市京橋区南新堀 1 - 2 満留寿商会 〈118-2〉, 藁包200ヶ入×2
本銅判松竹梅中平	明治37年12月7日	200ヶ	3円60銭	1,8銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈118-2〉
銅判中平	明治38年1月2日	200ヶ	2円90銭	1,45銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈124-5〉
本銅判菊中平	明治38年6月6日	200ヶ	4円20銭	2,1銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田 (昇一) 商店 〈124-2-4〉
銅判捻中平	明治38年6月22日	600ヶ	9円3銭	1,5銭	東京市日本橋区浜町 2 丁目 山和商店 〈124-2-2〉, 藁包200ヶ入×3
銅判楓中平	明治38年9月1日	400ヶ	7円	1,75銭	東京市京橋区南新堀 1 - 2 満留寿商会 〈124-2-7〉, 藁包200ヶ入×2
本銅判軍配中平	明治38年9月1日	200ヶ	7円40銭	3,7銭	東京市京橋区南新堀1-2 満留寿商会 〈124-2-7〉
銅判桐巴中平	明治39年1月10日	600ヶ	13円20銭	2,2銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈125-2〉, 藁包200ヶ入×3
本銅判あやめ中平	明治39年4月3日	200ヶ	4円40銭	2,2銭	東京市日本橋区蛸殻町3-11 岩田 (昇一) 商店 〈125-3-2〉
本銅判亀甲菊中平	明治39年6月28日	400ヶ	9円60銭	2,4銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈125-3-6〉, 藁包200ヶ入×2
青銅判中平	明治39年10月4日	200ヶ	5円2銭	2,51銭	東京市日本橋区蛸殻町1-4 家満加合資会社 〈125-2〉
銅判捻中平	明治39年10月5日	400ヶ	8円80銭	2,2銭	東京市京橋区南新堀 1 - 2 満留寿商会 〈125-3-1〉, 藁包200ヶ入×2
銅判笹中平	明治39年10月6日	420ヶ	2円12銭	5,05厘	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈130-3-39〉, 藁包70ヶ入×6
本銅判鳳凰中平	明治39年10月6日	20ヶ	90銭	4,5銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈130-3-39〉
本銅判鉄仙中平	明治39年10月6日	300ヶ	7円20銭	2,4銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈130-3-39〉, 藁包100ヶ入×3
本銅判花鳥中平	明治39年10月6日	400ヶ	6円80銭	1,7銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈130-3-39〉, 藁包200ヶ入×2
本銅判中平	明治39年10月12日	240ヶ	8円40銭	3,5銭	東京市日本橋区蛸殻町 1-4 家満加合資会社 〈125-3-3〉, 藁包120ヶ入×2
銅判菊蝶中平	明治39年12月6日	100ヶ	2円32銭	2,32銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈130-3-39〉
本銅判多色2合かん	明治30年1月5日	120ヶ	2円60銭	2,17銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈56〉
本銅判帯2合かん	明治30年2月22日	240ヶ	4円68銭	1,95銭	東京市日本橋区蛸殻町 2-14 瀧澤政吉 〈52〉, 藁包 120ヶ入×2
本銅判帯切立異風かん	明治30年2月22日	60ヶ	2円10銭	3,5銭	東京市日本橋区蛸殻町2-14 瀧澤政吉 〈56〉
本銅判帯2合かん	明治30年5月18日	240ヶ	5円4銭	2,25銭	東京市日本橋区蛸殻町 2-14 瀧澤政吉 〈46〉, 藁包 120ヶ入×2
本銅判帯2合かん	明治37年2月7日	360ヶ	7円56銭	2,1銭	東京市日本橋区浜町3-1 尾濃陶器問屋 森竹次郎 〈118-2〉, 藁包120ヶ入×3
本銅判2合かん	明治37年8月15日	296ヶ	6円38銭	2,16銭	東京市日本橋区蛸殻町 1 - 4 岡嶋善三郎 〈118-2〉, 藁包148ヶ入×2